

近代文学研究叢書

第十五卷

昭和女子大学

近代文学研究室

口 絵 写 真

杉	土	瀬	長	平	浅	押
谷	肥	沼		木	田	川
代	春	夏	塚	白	榮	春
水	曙	葉	節	星	次	浪

押川春浪

『冒險世界』一卷一號—明治四十一年一月一日刊

(昭和女子大学蔵)



春浪肖像(押川文子氏蔵)

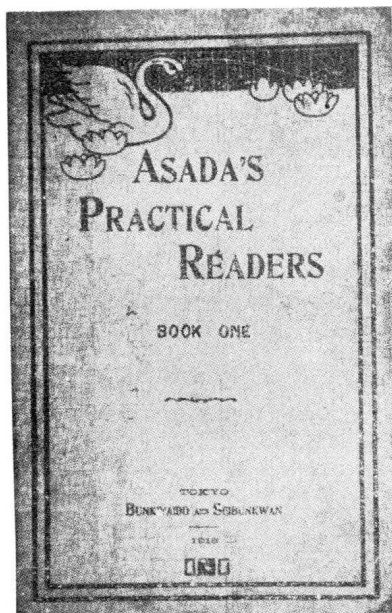


↑「春浪快著集」第一卷—四卷
大正五年十月十五日
同八年六月一日刊(昭和女子大学蔵)

『海底軍艦』—明治三十三年十月刊
(昭和女子大学蔵)



『武俠世界』一卷二號
明治四十五年二月一日刊
(昭和女子大学蔵)



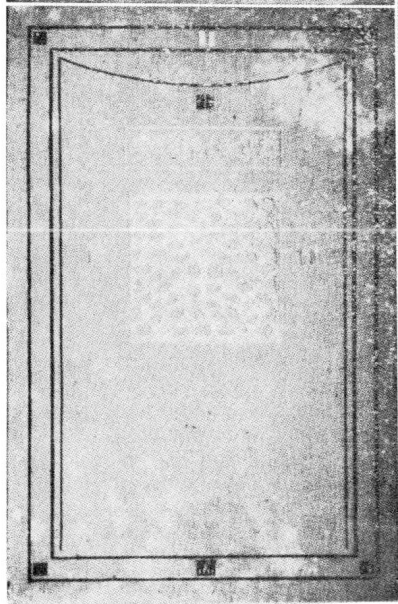
Asada's Practical Readers

一大正元年十月二十九日刊

(昭和女子大学蔵)



榮次晩年の肖像



「英語世界」一明治四十二年九月十五日刊

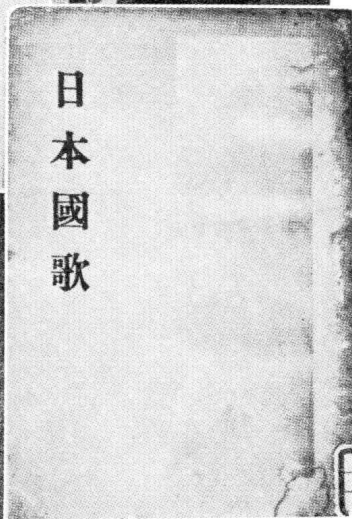
(上井磯吉氏蔵)

左下 Dictionary of Proverbs

一大正三年十二月三日刊(昭和女子大学蔵)

平 木 白 星

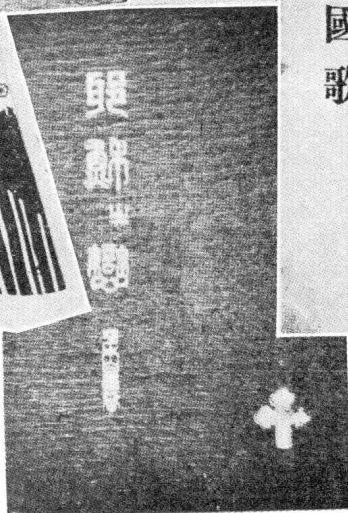
「釈迦」—明治三十九年
九月二十四日刊
(昭和女子大学蔵)



「日本国歌」の表紙
—明治三十六年二月二十日刊
(昭和女子大学蔵)

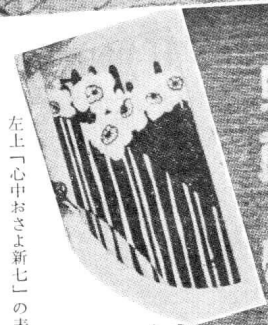
←「耶穌の恋」の表紙
—明治三十八年八月十八日刊
(昭和女子大学蔵)

右上 白星二十七歳頃の肖像



↑「片袖」第三集の表紙

—明治三十五年三月一日刊
(東京女子大学蔵)

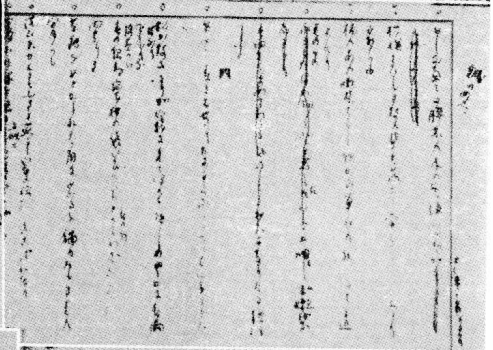


左上「心中おさよ新七」の表紙—明治三十七年十二月四日刊
(昭和女子大学蔵)

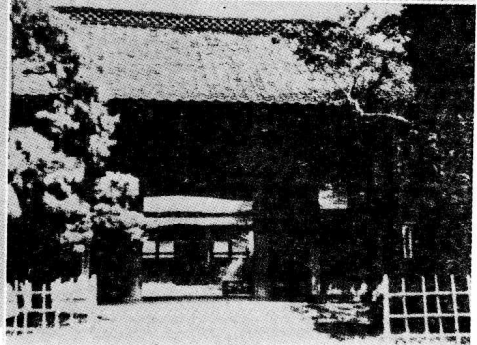
長 塚 節

右上「土」の表紙—明治四十五年五月十五日刊(昭和女子大学蔵)

左上朝日新聞掲載の「土」第一回—明治四十三年六月十三日
(東大明治文庫蔵)

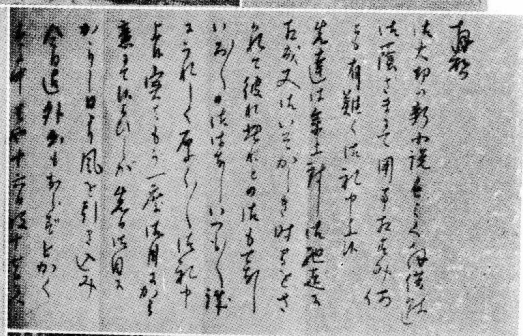
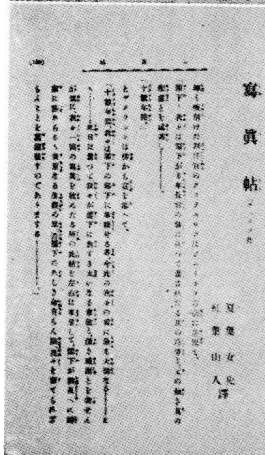
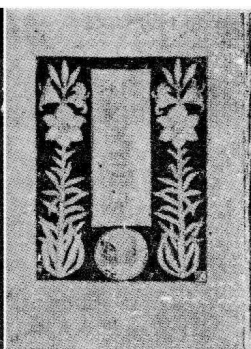


↑ 節 肖像 (長塚家蔵)
右中 「絨の如く」の原稿 (長塚家蔵)
右下 節生家の門



水戸中学校校友会誌「為櫻」
(平輪光三氏蔵)

葉 夏 沼 瀬



上右 チェホフ傑作集—明治四十一年十月刊（瀬沼勝彦氏蔵）

上左 夏葉（前列中央）とその家族（左から二人目は別）（瀬沼勝彦氏蔵）

中右 夏葉の書簡（岡野他家氏蔵）

下右 雑司が谷墓地にある夏葉の墓

夏葉・紅葉訳のチェホフ「写真帖」
一「新小説」明治三十六年十月号
（昭和女子大学蔵）

土 肥 春 曙

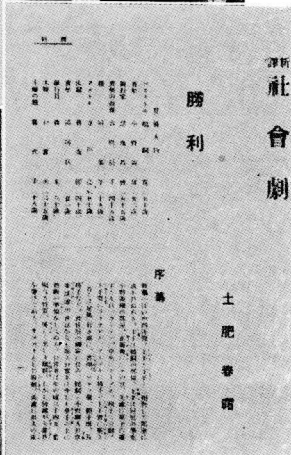
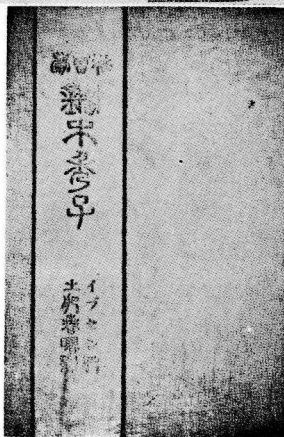


明治四十五年五月二十日～二十七日
帝国劇場 ハムレット舞台写真
ハムレットー土肥春曙
ガーツルドー上山浦路
(早稲田大学演劇博物館蔵)



春曙肖像 (元山美氏蔵)

社会劇「猶木秀子」―明治四十三年三月十五日刊
(昭和女子大学蔵)
↑番附 明治三十六年十一月二日(十六日本郷座
(早稲田大学演劇博物館蔵))



「新社会劇」の第一頁
―明治四十二年十一月二十八日刊
(昭和女子大学蔵)

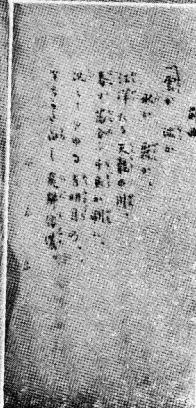
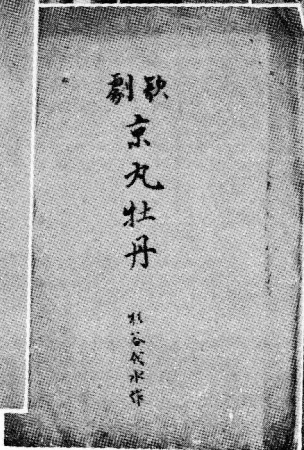
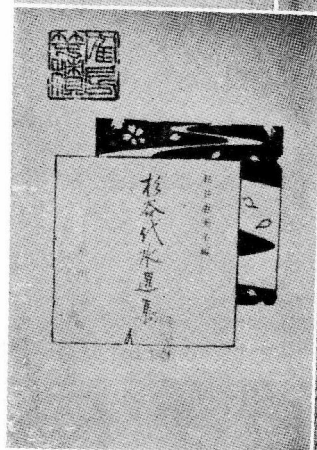
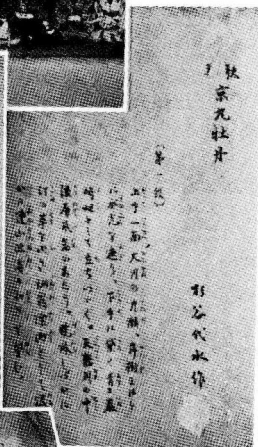
杉谷代水

中段右、下段
右、下段中央
代水筆跡「京
丸牡丹」の原
稿(杉谷須賀
氏藏)



「熊野」於帝國劇場明
治四十四年二月上演
柴田環(熊野)清水金
太郎(宗盛)
(杉谷須賀氏藏)

中段左「熊野」明治三十八年九月一日刊(杉谷須賀氏藏)



↑「杉谷代水選集」一昭和十年十一月十二
日刊(昭和女子大学藏)。中央一代水肖
像(杉谷須賀氏藏)

第十五卷の成立

本巻は大正三年十一月から大正四年四月までに歿した左の七名の研究調査を収めた。なお本叢書第一巻所載のB・J・ベッテルハイムより本巻土肥春曙までの内外の文人は百名に達した。

押川春浪は明治九年伊予松山に生まれた。父方義は日本基督教界の元老で思想人格ともに傑出し、東北学院を創立、青年男女崇拜の的となった人である。春浪は不羈奔放、蛮骨稜々たる性格が禍して多くの学校を転々し、二十八年早稲田大学の前身東京専門学校英文科に入学し、ついで政治科に学び三十四年卒業。在学中処女作「海底軍艦」を巖谷小波に激賞され、東京堂から出版、白面の書生が一躍文名をはせるに至った。春浪は平素より大丈夫の生命は天下国家に献ぐべきで、志す所は濟世の大業にあると信じていたが、本著を機縁に小波を中心とする本曜会の人々と知り創作に関心を高めることとなり、三十四年「銀山王」「塔中の怪」を出し、日清、日露戦争前後の国威宣揚、英雄待望の気運に投じた。「武俠の日本」「新造軍艦」「東洋武俠団」等の冒険小説の外に、四十一年一月博文館より主筆として「冒險世界」を創刊し、「怪人鉄塔」「不思議洞窟」等痛快奔放の快作を次々に発表、洛陽の紙価を高からしめた。四十五年小杉未醒らと「武俠世界」を創刊、又多くの冒険小説を著わした。大正三年十一月三十八歳を以て多彩な短生涯を閉じた。

浅田榮次は慶応元年山口県徳山に生まれ、明治十六年京都中学校を卒え、十七年東京英和学校（青山学院前身）に入学、二カ月後工部大学に入学した。英語と数学に秀でJ・M・ディクソンの下で英語に没頭、傍ら洗

礼を受け神田メソジスト教会員となった。後第一高等学校初期生に編入され、二十年九月帝国大学理科大学の数学科に進んだがキリスト教に対する情熱から神学研究を念願し、二十一年三月米國へ向い、ノースウェスタン、コロンビア、シカゴ各大学で神学、古代語学を研究、ヘブライ語、ギリシャ語等十三カ国語に通じ、演説に説教に伝道に才幹を発揮した。六合雜誌に「和訳聖書訂正の必要」を寄稿したのもこの頃である。二十六年シカゴ大学大学院博言科を卒業して、ドクトル・オブ・フィロソフィの学位を得て帰國、爾來青山学院、東京高等商業学校、中央大学等に教鞭を執り、特に「淺田の外語」と云われる外国語学校では十七年間の久しきにわたった。文部省から教科書調査、検定委員等を依頼され、四十一年から四十四年までは視学委員を命ぜられ英語の実地教育の指導に當った。その著 *Asada's English Readers, Asada's Practical Readers* は、内容の豊富さと道德性によって重んぜられ、また名著「英和和英諺語辭典」を著わした。大正三年三月歿、四十九歳。平本白星は明治九年千葉県に生まれ、東京英語学校で校長杉浦重剛の日本主義に涵養された。第一高等学校中退後、東京郵便電信局に勤務、終生通信省職員として精勵、一方生米の覇氣と情熱は詩作に注がれ、明治三十一、二年から、東京独立雜誌に「天てらす神」「隆盛の最後」「アギナルドに与ふる歌」、明星に「亜細亜」「西伯利亞行」、片袖に「心中おさよ新七」等を發表した。三十五年には、藤村、泣菫、鐵幹等と韻文朗誦会を起し研鑽実演した。三十六年第一詩集「日本国歌」を刊行、志士の氣魄の横溢するもので彼を呼んで「日本刀詩人」と言わしめた。特に叙事長詩に関心深く「心中おさよ新七」を始め、鐵幹、林外と共同制作の「源九郎義經」のうち三篇を作り明星に發表して詩の沃野を開拓した。その後懷疑的時代の反映により、宗教に題材をと

った劇詩「耶蘇の恋」「釈迦」等を作り深遠な哲理と象徵世界をねらった。四十一年には自ら「近世詩社」「都會詩社」「文芸時報」などを主宰したが、いずれも長続きしなかった。自然主義勃興の氣運に順応できなかったのであらう。大正二年駒込郵便局長として職務に尽瘁、過労のため四年十二月死去、三十九歳。

長塚節は明治十二年茨城県の地主の長男として生まれ、幼より神童と云われたが、水戸中学四年のとき神経衰弱で中途退学、作歌に親しみ、子規に共鳴して指導を受け、子規歿後は馬酔木、アララギの同人として左千夫、赤彦、茂吉等と万葉調の写生歌に励んだ。彼の歌は初期の万葉心酔時代から、写生至上主義を通り觀照の歌境へ進み、晩年は冴えと氣品と人生凝視の内觀的境地へ到達した。作歌のほか歌論に「万葉集卷の十四」「東歌余談」「写生の歌に就いて」等があり、写生文には「佐渡ヶ島」「才丸行」「須磨明石」等がある。写生文から發展した小説は特にすぐれ、いずれも郷土の自然と農民の生活を丹念に描いた独特のもので、短篇として「炭焼の娘」「芋掘り」「開業医」等八篇があり、四十三年六月から十二月にかけて朝日新聞に連載した「土」は、田園の自然とそれにとけ込む農民の暗い人生を村の行事や風景の中に描出したもので、農民文学の典型としての誇りをいつまでも失わない名作と云われている。彼は旅行を愛し、その足跡は殆んど全国にあまねく、名所旧蹟を探るとともに古美術の鑑賞を楽しんだ。喉頭結核のため晩年は病床にあり、「鍼の如く」一連の哀切、清澄の歌を遺し、大正四年二月三十七歳を以て九州大学病院で歿した。

瀧沼夏葉は本名郁子、明治八年山田家の女として群馬県に生まれた。九歳で東京駿河台のニコライ女子神学校へ入学、成績優秀で二十五年卒業、母校教師として働いた。学校から雑誌「裏錦」が発行され、彼女は中心

となつて文芸活動にはげみ、又ケーベル博士に師事してピアノの勉強をした。二葉亭が訳したツルゲーネフの「片恋」、内田不知庵訳の「罪と罰」などに感激してロシア文学研究に専念することとなり、更に結婚後夫のロシア語に対する協力で彼女の語学知識も充実した。三十四年紅葉に入門、夏葉の号を貰い、紅葉歿時まで師事した。彼女の業績は、チェーホフの作品を翻譯紹介したことで、心の花、新小説、文芸倶楽部等に続々と発表、四十一年には「露国文豪チェホフ傑作集」を出した。四十五年青鞥社の賛助員となり、雑誌青鞥に「叔父ワニヤ」「桜の園」などのすぐれた翻譯を掲載した。当時ロシア文学は多くは重訳であつたが、彼女は女的身を以て再度ロシアに旅行し、原書から初めてチェーホフを日本に紹介し、その芸術を伝えた功勞はチェーホフ移植史の第一頁を飾るものであらう。大正四年二月歿、三十九歳。

土肥春曙は明治二年熊本に生まれ、二十三年東京専門学校文学科第一期生として入学した。当時文学科は逍遙のシェイクスピア講義、英文学講座などを中心に活気に満ち、逍遙が教育に學問に演劇に最も熱情を注いだ時期であり、春曙はその影響を受け、朗読会の中心的存在となつた。二十六年卒業、直ちに読売新聞社に入社、二十九年退社まで劇評担当の鈴木幸兵衛の下で演劇の實際に通曉した。三十四年五月川上音二郎一座の欧州巡業に通訳兼文芸部員として同行、西欧演劇の實際に触れ翌年九月帰国、川上一座で「マーチャント・オブ・ヴェニス」を上演させた。三十八年、鐵笛、薇陽らと朗読会を「易風会」と改め実演を目的とし、雅劇「妹山背山」を上演。三十九年二月文芸協会発足に当り彼は演技指導を担当、四十一年一月本郷座で第二回公演に彼は「ハムレット」に扮し新人を感動させ芸術的に成功した。四十二年改組された文芸協会では幹事に選ばれ、男女俳

優を養成する附設演劇研究所で朗読演技の指導に當った。四十四年帝国劇場公演で再び「ハムレット」を演じ、心理の葛藤を巧みに表現し好評であった。大正二年七月文芸協会解散後、鐵笛、大伍等と劇団「無名会」を結成、翌年一月帝国劇場で「オセロー」を上演、九月第五回公演の「靈驗」を最後の舞台として大正四年三月歿、四十七歳。新劇草分けの功績を忘れてはならない。

杉谷代水は明治七年鳥取県に生まれ、二十八年上京、東京専門學校に入学した。健康を害し翌年中退したが彼の才能と慎重勤勉さを逍遙に認められ、その推挙で富山房編集部に入り、二十年間社務に尽瘁、一意専心良書の編集に没頭し誠実の氣風を永く富山房編集部に遺した。明治三十年長詩「神曲余韻」を早稲田文学に発表、琵琶湖と富士の創生伝説を優雅典麗な七五調九十六行に詠み、その詩想、詠法ともにすぐれたものであった。この年早稲田学報に「新体詩の将来を論ず」を発表、日本にも長篇詩成立の可能性あることを述べその發達を熱望した。三十四年頃まで早稲田文学、東京独立雜誌、小天地、明星等に二十篇近くの詩を発表、「月神語」「わかれの春」「宇宙の妙律」等いずれも百行を超える大作をものした。三十四年一応詩筆を収め、郷友で音楽家田村虎藏に求められ唱歌「日章旗」「行軍」「旅情」「星の界」等六十余篇を作った。又逍遙の「新楽劇論」に刺激され新曲「小督」「熊野」「狹穂姫」や史劇「大極殿」を発表した。翻譯としては「学童日誌」「小夜衛」「沙翁物語」「希臘神話」等があり、芳賀矢一と共著の「作文講話及文範」「書翰文講話及文範」がある。多才多能、勤勉な彼も健康に恵まれず、大正四年四月老幼の肉身に心を残しつつ、壯齡四十二を以て歿した。

(昭和三十五年五月二十五日 昭和女子大学近代文学研究室)

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑の三先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこび下さるであろう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歲月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従つて死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中で編集ものは、所要の小題を書題名欄に、単行